

超高齢(91才)農村婦人に見られた帯状疱疹の1例について

医療法人社団正啓会病院

長谷田 祐作, 小西 秀男, 小西 啓子

富山医科薬科大学第一外科

津田 基晴, 池谷 朋彦

I. はじめに

私達は今回(平成3年12月上旬)農村地区に生まれ育った超高齢(91才)女性に発症した帯状疱疹の一例を診療する機会を得た。

帯状疱疹は特に珍しい感染症とは言えないが農村地帯では初診の医療施設として専門の皮膚科を訪れることは比較的稀であり内科あるいは外科を標榜する医院などで受診し皮膚科を紹介されるのが通常のパターンではないかと思われる。

私達の診療し得た一例は患者の年齢・皮疹の発生部位など比較的珍しいものと考えられるので、ここに報告し会員諸兄の御参考に供するとともに御批判など賜れば幸甚である。

II. 症例について

症例：S.I. 明治33年(1900年)2月生まれ(91才)。女性

主訴：右腰腹部の皮疹(紅班)と激痛

既往症及び生活史の概要など：富山市の北東部、水橋地区三郷(図1のA及びB)生まれ、17才時に同じ富山市北東部高島地区(図2のC)に嫁入りし2男6女の母親となった。上記水橋地区三郷も高島地区も共に農村地帯であり此の間はすべて農業に従事していたとの事であった。長男は昭和20年に戦死、次男は結核に罹患し死亡している。

本人は21才時(1922年)腸チフス罹患、87才時(1987年)脳卒中罹患、右片麻痺を貽し

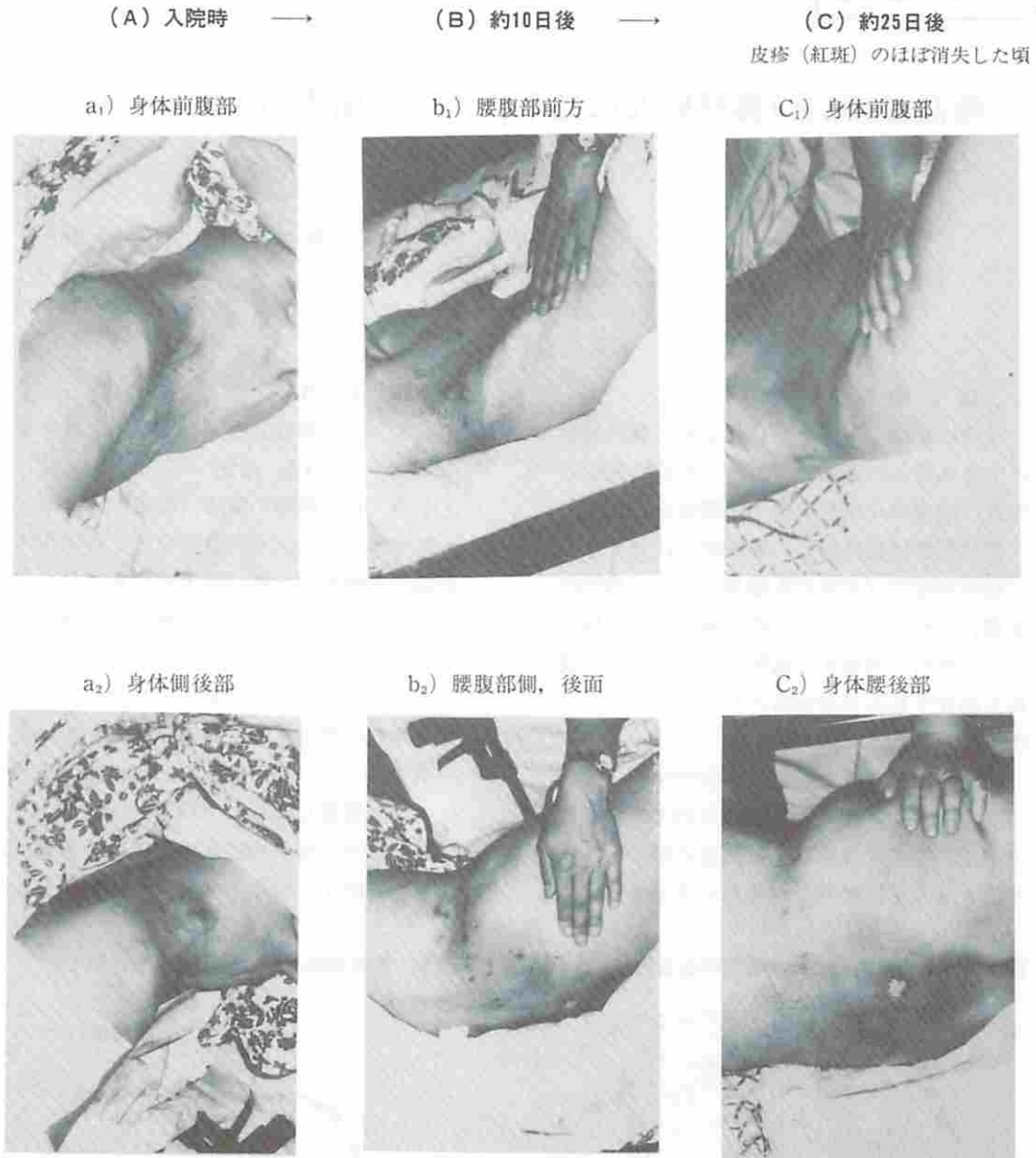
図1 患者の出生地と17才までの生活地



図2 患者の嫁ぎ先(17才～現在)



図3 症状の経過



て居る。幼少時、水痘罹患の有無については不詳である。

現病歴：平成3年（1990年）12月12～13日ころより右腰腹部に疼痛を伴う皮疹（紅斑）の発生を訴え、消毒薬（イソジン）塗布など試みて居たようである。該部に触れると激痛があり近医受診の結果同月16日に右第Ⅲ、Ⅳ

腰神経の走行に沿う帯状疱疹と診定され当院入院となる。

症状、経過などの概要：入院当初に37℃台の軽熱出沒あり、胸部X線写真では心左室の拡張を認めるも特に障害は訴えて居ない。

身長 161cm 体重 44kg

臨床検査所見：

【血液】R 346万 W 5,900 Hb 10.8 Ht 31.9 Pt 27.3 T-Bil 0.6 TTT 1.5 ZTT 8.6 GOT 22 GPT 7 Alp 211 LDH 495 ChE 4207 TP 6.8 BuN 25.6 Na 138 K 5.6 Cl 106 T-Cho 189 クレアチニン 1.4 TG 74 CPK 40

【血糖】138 CRP - HBs抗原 -

【免疫蛋白】IgG 1402 IgA 261 IgM 158

皮疹（紅斑）その他の所見：

皮疹（紅斑）は図3に写真像として示したが a₁, a₂ は初診当時のもので衣類が当該部に接触しても激痛を訴える。b₁, b₂ は入院後10日、疼痛がかなり軽減した頃のものであり、c₁, c₂ は入院後25日頃皮疹（紅斑）がほぼ消退した頃のものである。なお臀部に白斑が見られるがこれは脳卒中入院時に発生した褥瘡の治療による色素脱失像である。

ADL：ほぼ寝たきり状態であるが介助による坐位の保持は短時間（一時間程度）であれば可能である。

長谷川式検査値は20で、数字などの取扱いに Weak Point あるも意識発語共明瞭。

III. 治療の概要

主要薬剤として私達の選んだものは「アシクロビル注射液」（ゾピラックス）である。

本剤の標準的使用方法としては5 mg/kg 1日3回となって居るが本例については超高齢という点を勘案50 mgを1日1回維持液に溶解ビタミン剤と共に10日間点滴静注を行ないました。その結果疼痛の消失は案外早く約一週日で略治状態を見ることができた。皮疹（紅斑）の消失はやや遅く約1か月を要した。

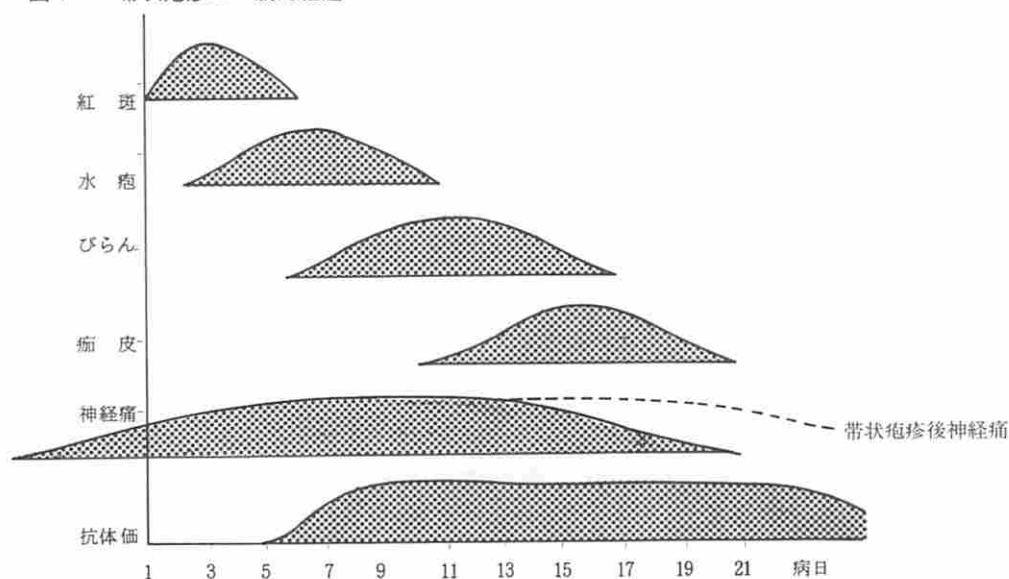
なお図4に带状疱疹の一般的経過を図示したが本症例については水疱、びらん、痂皮形成は明瞭ではなく図3に見る如く皮疹（紅斑）と神経痛が主体であった。

IV. 考 察

带状疱疹患者の年齢分布を見ると図5に見られるように70才を過ぎると激減するが反面人口1,000対の带状疱疹発症頻度は逆に若年者の3倍を越えるとされている。（図6）

また带状疱疹の発症部位については図7に見る如く頸・胸髄の神経節、中でも三叉神経

図4 带状疱疹の一般的経過



の第1枝が好発部位とされて居り症状的には激しいものが多いとされている。

本症例について見ると比較的発症頻度の少ない腰神経の走行に沿うもので症状的には割合に良好な経過を取ったものと考えられ使用薬剤の効果も疼痛に対しては相当の鎮静効果が認められたと考えることが出来る。

なお図8はイングランドにおける近年(16年間)の年齢階層別帯状疱疹の発生状況を

示すので参考として挙げる次第である。

V. おわりに

日本においては、つとに高齢化社会の到来が強調され近年特に寿命の延長が諸外国を凌駕する勢いを見せて居ることが報道されて居り、実に慶賀すべきことと言わねばならず、今後更なる努力が期待される。反面珍しい症例、高齢者でなければ見られない疾患などに

図5 帯状疱疹患者の年齢分布

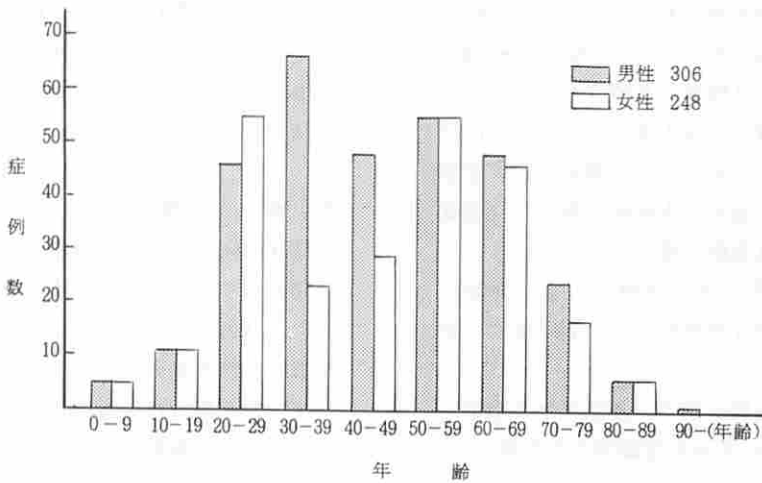


図6 加齢と帯状疱疹の発症頻度

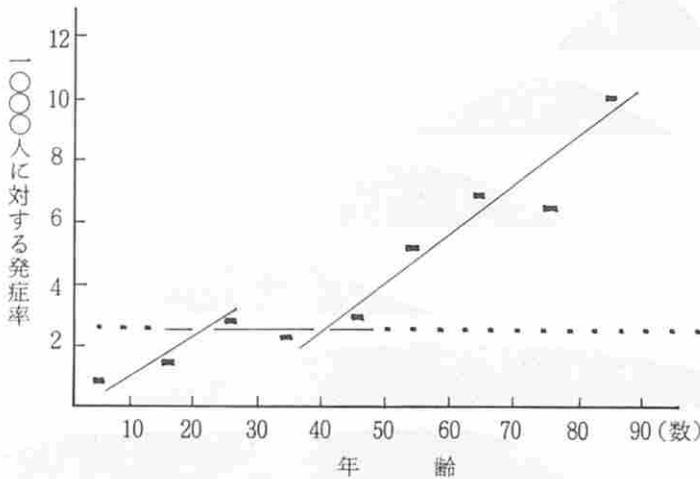


図7 帯状疱疹の発症部位

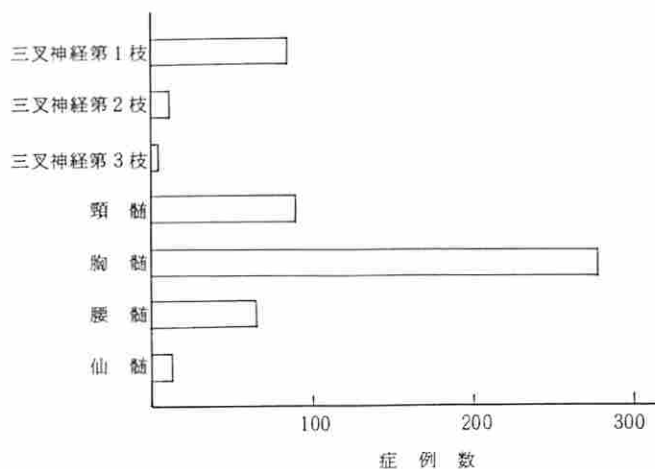


図8 イングランドにおける帯状疱疹の年齢別分布

Distribution by Age of 192 Cases of Herpes Zoster Observed over a 16 Year Period in a Population of 3534 People in England

Age (yr)	Population	Number of cases	Rate per 1000	Annual incidence per 1000
0-9	510	6	11.8	0.74
10-19	455	10	22.0	1.38
20-29	412	17	41.3	2.58
30-39	491	18	36.6	2.29
40-49	492	23	46.7	2.92
50-59	454	37	81.5	5.09
60-69	350	38	108.6	6.79
70-79	263	27	102.7	6.42
80-89	99	16	161.6	10.10
90-99	8	0	—	—
Total or mean:	3534	192	54.3	3.39

After Hope-Simpson.⁽⁶²⁾ By personal communication, Hope-Simpson states that the population in each age group represents the mean obtained from 6 of the annual censuses taken during the 16-year period.

ついでの研究，対策など要望される処である。

本報告が何等かの参考ともなれば幸甚である。

なお本報告の概要については第3回日本老年医学会北陸支部総会，日本内科学会東海・北陸合同地方会（第158回）において報告したことを申添える。

文 献

1. 水疱・帯状疱疹：
高橋理明／新村真人編，メディカル・トリビューン社
2. Viral Infections of Humans: Edited by Alfred S.Evans